

50代教員がもつ「学び続ける教員像」についての研究

谷山優子

The Image that Teachers in Their 50's Have of Teachers Who Keep Learning

Yuko TANIYAMA

1. 問題と目的

平成24年8月の中教審で「教職生活の全体を通じた教員の資質能力の総合的な向上方策について」という答申が出され、その中で「学び続ける教員像」の確立についての改革の方向性が打ち出された。主な趣旨は「教育委員会と大学の連携・協働による教職生活の全体を通じた一体的な改革、新たな学びを支える教員の養成と学び続ける教員を支援する仕組みの構築が必要」ということであった。具体的には、教員養成の改革の方向性として、教員養成を修士レベル化し、高度専門職業人として位置づけることや、教員免許制度の改革の方向性として「一般免許状（仮称）」、「基礎免許状（仮称）」、「専門免許状（仮称）」を創設することなどが示された。これらの改革のために、教員を養成する大学と、採用する教育委員会とが連携し、養成段階、採用段階、初任段階、そして現職段階及び管理職の段階で協働して、教員の資質能力育成を高度化していくという方策も示された。このような答申が出された背景には、社会の急速なグローバル化や少子高齢化により、21世紀を生き抜くための力をもつ人材育成のため新たな指導力を身に付けることが教員に期待されている現状がある。また、学校現場での様々な問題の高度化・複雑化により、初任段階の教員が困難を抱えていることから、養成段階での指導力育成強化の必要性が課題としてあがってきている現状もある。

そして、平成27年12月の中教審の答申「これからの学校教育を担う教員の資質能力の向上について～学び合い、高め合う教員育成コミュニティの構築に向けて～」では、「新たな知識や技術の活用により社会の進歩や変化のスピードが速まる中、教員の資質能力向上は我が国の最重要課題であり、世界の潮流でもある。」という教員政策の重要性が冒頭で述べられている。この教員施策の1つとして、平成24年8月の中教審の提言である「学び続ける教員像」に触れ、「真の意味で『学び続ける教員像』を具現化していくための教員政策を進めていく必要がある。」としているのである。

教員研修政策についての先行研究として2点ほどあげておく。秋田（2009）によれば、アメリカの現職教育において、教師の技能や資質の不足部分を強化する「診断—治療」という医療モデルや電気回路の問題箇所を修理する「故障—修理」の工学モデルは、教師の学習に有効に機能しないことが示

されているという。佐古（2011）は、学校の教育活動の質や水準は、相当な程度、個々の教員の意識と行動に依存せざるをえないとし、この個業性のデメリットを減らすには、教員それぞれの主体性（自律性）を助長する組織化が必要であるとしている。教師の学びは、教師と大学研究者との協働的な研究や教師自らの手による研究など、内側からの研究へと転換することが重要であるともいう。

これらの研究からもわかるように、教員の「学び」をどうとらえるか、それを教育施策として研修を行う場合に有効な方法は何か、整理して方法を提示していかねばならないだろう。

近々の教育施策改革の流れの中で、教員が学び続けていかなければならないということは大まかに賛同できる。しかし、教員は今日まで自ら学び続けてきたではないか、なぜ今さら中教審の答申で提言せねばならないのだろうかという疑念が浮かび上がった。教員の職責に研修義務があるが、そういった義務の範疇を超え、教員は自発的に学び続けようとしてきたと筆者は考える。この点を明らかにするため、教員経験30年以上の50代の教員に「あなたは学び続けてきたか」と問いかけたかったのが、本研究を行う大きな動機である。おそらく調査対象のすべての教員が、自分は「学び続ける教員」であると回答し、それは、教師としての使命だからであると回答するであろうという仮説をたてた。このような問いについての調査方法として、選択肢からあてはまるものを記号で選択するアンケート調査はなじまないと考えた。本来ならインタビューで詳しく聞き取り調査を行いたいところである。しかし、まずは本研究の初発の調査として自由記述での研究調査を行うことにし、返ってきた回答について検証したいと考える。

2. 研究方法

2.1 対象

「学び続ける教員」についての研究の趣旨をメールや対面で説明をし、賛同を得たA県、B県、C県の小学校・中学校・高等学校で教員をしている50代の男女20名に自由記述アンケートを送付した。返答のあった15名を対象とした。

2.2 実施時期

平成28年6月末にアンケートを送付した。回答の期限を7月末に設定した。

2.3 データ収集方法

調査は、調査項目を精選して、7問の質問を設定した。質問項目は、「学び続ける教師」の定義を問うてから、学び続けたこと、学び続けられなかった阻害要因と時期、なぜ学び続けるのかを問うものとした。自由に記述していただき、回答のキーワードをデータとして収集した。

2.4 データ分析方法

まず、回答の文脈に注意しながら類似の文節として読み取れる単位でサブカテゴリーを抽出した。次に、サブカテゴリーの類似性・相違性を検討しながらKJ法で分類を行い、最終的にカテゴリー化

を生成した。2名の教育学研究者のスーパーバイズを受け、データ分析の信頼性を高めた。これらの研究者は、学校現場で豊富な経験を積み、現在大学等で教鞭をとり、教員養成を行う50代の研究者である。アンケートの回答の文脈まで読み取るにふさわしいと考え依頼した。

3. 結果

3.1 対象者の属性

対象者の属性は表1に示した。50代の教員15名は、男性6名、女性9名である。校種別でみると、小学校7名、中学校5名、高等学校3名であった。また、50代であるため、教育委員会経験者は対象者の53%にあたる8名、管理職経験者は対象者の60%にあたる9名であった。

表1 対象者の属性

対象者	性別	年齢(歳代)	校種別	教育委員会経験	管理職経験
A	男	50	小学校	なし	あり
B	男	50	中学校	なし	あり
C	女	50	小学校	なし	あり
D	女	50	小学校	なし	なし
E	男	50	中学校	なし	あり
F	女	50	中学校	あり	なし
G	女	50	中学校	あり	なし
H	女	50	小学校	あり	なし
I	女	50	小学校	あり	なし
J	女	50	高等学校	なし	あり
K	男	50	高等学校	あり	あり
L	女	50	中学校	なし	なし
M	男	50	小学校	あり	あり
N	女	50	小学校	あり	あり
O	男	50	高等学校	あり	あり
				平均 53.3%	平均 60.0%

3.2 「学び続ける教員」とはどういうことをさすと思うか

「学び続ける教員」とはどういうことをさすと思うかは、表2に示した。以下、本文では、カテゴリーは《 》、サブカテゴリーは< >、回答の引用は「 」で表すこととする。

学び続ける教員とはどういうことをさすと思うかという問いに対して、回答はサブカテゴリー 11個が抽出され、カテゴリーは、《変化の激しい社会に生きる子どもに合った教え方を求め続ける教員》、《子どもの成長のため自己の資質能力を高め続ける教員》、《揺るがない教育とは何か探究し続ける教員》、《教員の職責の遂行として当然のこととして学び続ける教員》の4つを抽出した。

3.2.1 変化の激しい社会に生きる子どもに合った教え方を求め続ける教員

《変化の激しい社会に生きる子どもに合った教え方を求め続ける教員》では、「社会の変化のスピードがどんどん速くなり、新しい技術や知識がどんどんふえてきている。」や「学び続けないと、すぐ

いスピードで変化する現場に対応できない。」〈新しい知識や技術〉という回答があった。50代の教員は、初任の頃は土曜日の半日授業があり、それが月1回の土曜日休日、隔週で土曜授業、完全週休二日制というように「ゆとり」の文言とともに学校現場が急速に変化したという実感を強く持つ。「登校拒否」や「校内暴力」という1980年代の学校の荒れを体験し、今では「不登校」や「いじめ」などと生徒指導が変化し、40代後半で「特殊教育」が「特別支援教育」になり、通常の学級の担任であるのに、学級に「発達障害」という障害のある子どもが在籍していると言われ、教育の視点を大きく変換せねばならなかった世代である。

また、「自分が変われば子どもも変わる。」「教える知識や技術を伸ばして、前向きに子どもの成長に携わる。」〈教員自身の変革〉という回答からは、子どもはすぐには変わらないが、自分が学び続け変わっていく姿を見せることで、子どもを変えていけるという信念をもち、くじけずあきらめず、粘り強く指導していく教員の姿を見ることが出来る。

そして、「小学校英語・情報教育・プログラミングなど学ばないと教えられない。」「指導法や理論は新しいものがいっぱいあり、本や新聞を読み、有益なテレビを視聴し、多くの方々と情報交換をし、悩みは出し合い、とにかく前に向けて進む。」〈多くの課題解決に向けて〉という回答は、まさに最新の教育課題として、新聞やニュースで取り上げられている教育課題ばかりであり、情報収集しながら、できないと言わずに取り組んでいきたいという50代の教員の決意が読み取れる。

3.2.2 子どもの成長のため自己の資質能力を高め続ける教員

《子どもの成長のため自己の資質能力を高め続ける教員》では、「興味を持ち続け、聞き、調べる。」「子どもたちの『生きる力を育成する』ために教師としての資質能力を高める。」〈自ら成長し生徒を成長させる〉という回答を得た。これらは、変化の激しい時代といった社会背景に関わらず、教員は子どもを成長させるものだという教師像からきていると判断し分類した。このような回答の中には、今現在関わっている子どもの10年先20年先まで見通し、しっかりと社会で生きてほしい、そのための力を今つけてやるのが教師であるという文脈が読み取れる。

また、『『教職に対する強い情熱』をもち、児童生徒のために『教育の専門家としての確かな力量』『総合的な人間力』を高めようと行動する。』『多忙だが、資質と能力があれば、多忙感ではなく、達成感ややりがいを感じる。』〈子どもに恥ずかしくないように誠実に対応し日々努力〉という回答は、子どもがすぐによくなるとか、教育の結果をすぐに出したいというような気持ちからではなく、教師自身の誠実さを陰日たたく示し続けることが自分自身の誇りであるという文脈が読み取れる。

そして、「自身の人間性の向上をめざす。」「自己の技術と人間性の向上をめざし、研究を続ける。」〈職能の向上と教養の高揚〉という回答は、教育に携わる者は人間性の向上をめざさねばならないという文脈が読み取れる。こういう点が、教職は聖職であるという考え方に通ずるのであろう。

3.2.3 揺るがない教育とは何か探究し続ける教員

《揺るがない教育とは何か探究し続ける教員》では、「教員生活30年を超えるが、学校現場も社会

情勢も大きく変わり、多様な価値観に戸惑うことも多くある。そのような変化の激しい時代に応じた教育とは何か、一方、どんな時代にあっても揺るがない教育とは何かを探求する。」「授業、学級担任、クラブ指導、校務分掌等を学問的知見や研修、現場の実践、社会情勢等から学ぼうとする。」＜教育は不易と流行＞という回答を得た。教育を捉える時には、不易と流行を忘れてはならない。これらは、車輪の両輪であり、変わってはいけないもののことを忘れてはならないというのは、ベテラン教員や退職教員が常に口にする言葉である。

そして、「実際にたくさんの経験をしてみて学ぶ。」「心理学や児童虐待や障害児教育など福祉関連も幅広く学んでいく。」＜学びは学校教育にかかわらず広い分野からも生まれる＞という回答は、教員養成段階の学生が教育実習時に現場の教員からよく言われる言葉で、引き出しをたくさん持つべきであるという考え方につながる事がわかる。書物にあたるだけではダメで、自身が体験してみなくてはじめてわかり、子どもに伝える時に口先だけでない話ができること50代の教員は考えていることがわかる。

また、「自己に満足せず、日々内外に教えを求める。」「教育の成果がはっきりと現れるのには長い時を要する場合が多い。けれども、教育の本質を見失うことなく、成長した姿を見るために愛がある指導を続ける。」＜試行錯誤し続ける＞という回答は、教員を30年以上も続けていながら、大変謙虚であることがわかる。そのうえ、教員はすぐに結果が出ない子どもの変容を信じて、粘り強く指導し続けるものであるという精神をとらえることができる。

3.2.4 教員の職責の遂行として当然のこととして学び続ける教員

《教員の職責の遂行として当然のこととして学び続ける教員》では、「保健体育の教科の特性として、日々進化する競技技術を絶えずチェックしていないと生徒の前に立てない。教師として当然のことだと思う。」「学び続ける姿勢を失った時は教える資格を失う。」＜学び続けなければ生徒の前に立てない＞という回答を得た。ここにあるように、子どもの前に立てないという全く同じ文言が、別の設問でも複数の教員から上がっていたことに驚いた。子どもの前に立つ教育者であるために、50代の教員が共通して抱く覚悟として共通して認識されていると考える。

また、「仕事をする上で必要な知識・技術の追究は当然」「教員として向上することと、人として向上することはほぼ同じで当然のことと思う。」「教員の義務と責任である。」＜責務（使命）の全うのため当然＞という回答は、誰に強制されるものでもなく、この仕事に就いたからには、学び続けることは当然であるという考え方を表し、教師の使命感の高さを如実に示すと考える。これら文脈の中には、研修制度として強制的に研修をさせられることを嫌う意思表示が含まれる。教師は自分に必要な研修を自分で選択して行うのだという自律した意志で学び続けるものであるという考えが存在する。ここが、いわゆる聖職者としての自覚で、労働者とは違うという教員の矜持と誇りが文脈から読み取れた。

表2 「学び続ける教員」とはどういうことをさすと思うか

カテゴリー	サブカテゴリー	具体的内容
変化の激しい社会に生きる子どもに合った教え方を求め続ける教員	新しい知識や技術	社会の変化のスピードがどんどん速くなり、新しい技術や知識がどんどんふえてきている。 学び続けないと、すごいスピードで変化する現場に対応できない。
	教員自身の変革	自分が変われば子どもも変わる。 教える知識や技術を伸ばして、前向きに子どもの成長に携わる。
	多くの課題解決に向けて	小学校英語・情報教育・プログラミングなど学ばないと教えられない。 指導法や理論は新しいものがいっぱいあり、本や新聞を読み、有益なテレビを視聴し、多くの方々とは情報交換をし、悩みは出し合い、とにかく前に向けて進む。
子どもの成長のため自己の資質能力を高め続ける教員	自ら成長し生徒を成長させる	興味を持ち続け、聞き、調べる。 子どもたちの「生きる力を育成する」ために教師としての資質能力を高める。
	子どもに恥ずかしくないように誠実に対応し日々努力	「教職に対する強い情熱」をもち、児童生徒のために「教育の専門家としての確かな力量」「総合的な人間力」を高めようと行動する。 多忙だが、資質と能力があれば、多忙感ではなく、達成感ややりがいを感じる。
	職能の向上と教養の高揚	自身の人間性の向上をめざす。 自己の技術と人間性の向上をめざし、研究を続ける。
揺るがない教育とは何か探究し続ける教員	教育は不易と流行	教員生活 30 年を超えるが、学校現場も社会情勢も大きく変わり、多様な価値観に戸惑うことも多くある。そのような変化の激しい時代に応じた教育とは何か、一方、どんな時代にあっても揺るがない教育とは何かを探求する。 授業、学級担任、クラブ指導、校務分掌等を学問的知見や研修、現場の実践、社会情勢等から学ぼうとする。
	学びは学校教育にかかわらず広い分野からも生まれる	実際にたくさんの経験をしてみよう。学ぼう。 心理学や児童虐待や障害児教育など福祉関連も幅広く学んでいく。
	試行錯誤し続ける	自己に満足せず、日々内外に教えるを求める。 教育の成果がはっきりと現れるのには長い時間を要する場合が多い。けれども、教育の本質を見失うことなく、成長した姿を見るために愛がある指導を続ける。
教員の職責の遂行として当然のこととして学び続ける教員	学び続けなければ生徒の前に立てない	保健体育の教科の特性として、日々進化する競技技術を絶えずチェックしていないと生徒の前に立てない。教師として当然のことだと思う。 学び続ける姿勢を失った時は教える資格を失う。
	責務（使命）の全うのため当然だ	仕事をする上で必要な知識・技術の追究は当然である。 教員として向上することと、人として向上することはほぼ同じで当然のことと思う。 教員の義務と責任である。

3.3 学び続けてきたものは何か

学び続けてきたものは何かは、表3に示した。表のサブカテゴリーの（小）は小学校教員、（中）は中学校教員、（高）は高等学校教員の回答をそれぞれ示す。

学び続けてきたものは何かという問いに対して、回答はサブカテゴリー 14個が抽出され、カテゴリーは、《授業（指導法・指導力）》、《生徒指導・子ども理解》、《ライフステージに合わせた学び》、《教育哲学》、《生活すべて》の5つを抽出した。

3.3.1 授業（指導法・指導力）

《授業（指導法・指導力）》では、「英語科の協同学習についての指導法の在り方などを学んだ。」「よりわかりやすい授業ができる授業力」、「授業力の向上」〈自分の専門教科（小中高）〉、「学校の研究テーマにあわせて、国語、算数を学んだ。それを機会に国語を研究テーマとして学び続けている。」、〈国語・算数（小）〉というように、さすがに授業の指導方法については、小中高すべての校種の教員から多数の回答があった。

同じく授業に関して、「生活、総合的な学習などの新しい教科・領域について、教育内容や指導方法を書籍や研究会、研修会への参加で学んできた。」「生活科や総合という新しい教科・領域について大学院派遣でじっくり学んだ。」「〈新しい教科（小）〉や、「情報教育については、好むと好まざるに関わらず学び続けていけないことには、現場のICT化についていけない。」「教育テレビ放送利用、視聴覚教材自作、テレビカメラやパソコンなどその時々最新の視聴覚機器や情報機器を使った授業」〈情報機器操作（小）〉と2つのサブカテゴリーで回答があったように、いずれも小学校教員が直面した生活科や総合的な学習の時間、情報といった新しい教科（領域・分野を含む）の指導法についての学びである。50代の教員にとっては、プリント作成方法一つをとっても、ガリ版刷りからワープロ作成、パソコンソフト「一太郎」、パソコンソフト「Microsoft Word（ワード）」というように若い頃から次々と新しくなっていき、学び続けねばならない時代を乗り越えてきた感がある。不易と流行では流行の部分をさす。

また、「子どもにわかる伝え方、見せ方について課題意識を持ち、プロのコンサルタントに学び、若手教員に伝えた。」「わかる授業、やる気になれる授業のため教材研究」〈わかる授業（小中）〉という回答は、すべての授業に共通して、いまさらいうまでもないことと思われるが、絶対にあげておかなばならないものであるという回答者の気持ちを読み取れる。不易と流行でいうなら、不易の部分である。

3.3.2 生徒指導・子ども理解

《生徒指導・子ども理解》では、「学級の中で協調性を身につけさせる指導法」〈学級経営（小中）〉、「子どもの心理状態を考えること」〈生徒指導〉、「心理的サポートの大切さを実感し、学校心理士、ガイダンスカウンセラーの資格を取得した。」「〈心理学（小中）〉の3つのサブカテゴリーでの回答が、授業と両輪を成す生徒指導関連であった。子どもの心をつかんで、よりよい人間関係を結び、このクラスでよかったと子どもが満たされ、非行に走らず自己実現に向けて努力させたいとどの校種の教員も願っている。そのための力をつけたいという文脈が読み取れる回答が多数あった。

また、小学校では学級経営で不可欠である発達障害のある子どもの指導方法や、特別支援学級（特殊学級）を担任したときをきっかけにということで、「障害児教育について、障害理解や教え方、教材を学んだ。」「様々な知識や新しい知見を得て、現場の先生方に役立ちたい。」「担任した子をどう指導するか学び続け、特別支援教育士の資格を取得した。」「〈特別支援教育（障害児教育）（小中）〉という回答を得た。50代の教員が、特殊教育から特別支援教育への転換を経験したのは40代半ばである。

先に述べた、新しい教科や授業方法、そして特別支援教育のような新しい教育方法が現在50代の教員が40代であった頃に集中したことがきっかけで、学び続けるテーマを得たことが推測される。

最後に、「顧問として戦術、戦略を含めた専門性や指導法」＜部活動指導（中高）＞といった回答が中高の教員からあがっている。部活動指導は、中高の教員には自身の家庭生活の時間を犠牲にするほど大部分を占める。土日の練習や試合の引率は大きな負担になっている。しかし、部活動指導で築いた生徒との人間関係が、思春期の子どもの困難な生徒指導や授業態度の問題を解決する糸口になることがあるので、おろそかにできない。部活動をするのが当たり前と思ひ、20代の頃からやってきたのである。膨大な時間と情熱を費やした部活動指導は、学び続けてきたことという項目に当然入るのだという意気込みが読み取れる。

3.3.3 ライフステージに合わせた学び

《ライフステージに合わせた学び》では、「社会の変化に対応するため、先を見越した教育について学び、教員に伝えること。」＜中堅・教育委員会・管理職としての職務（中高）＞、「管理職として、安全・管理を軸にした指導」＜安全・管理（中）＞という回答を得た。2つのサブカテゴリーに分けてはいるが、どちらも、50代の教員が中堅教員、教育委員会、管理職等の役職の段階を上りながら、立場に応じて学校全体に関わる学びを自ら行ってきたという経緯があることがわかる。そのうえ、管理監督者としてだけでなく、教員の先輩として後進に教育の本質を残して去りたい、そのためにもまだ自身は学び続けなければという気構えが読み取れる。

3.3.4 教育哲学

《教育哲学》は、「教育哲学や人の生き方など、通勤電車で本を乱読」＜生き方（小）＞という回答に基づき、抽出したカテゴリーである。学び続けたものは何かという問い以外にも、複数の教員が「生き方」「生きる」「生かされている」「豊かな人生」といった文言を記述していた。60歳の定年退職が視野に入ってきた50代の教員であるからなのか、それとも若い頃からそう考えて子どもの前に立ち続けてきたのかはこれらの記述だけでは不明である。このような回答については、インタビューなどで詳しく聞き取りたい部分である。

表3 学び続けてきたものは何か

カテゴリー	サブカテゴリー	具体的内容
授業（指導法・指導力）	自分の専門教科（小中高）	「英語科の協同学習についての指導法の在り方などを学んだ。」 「よりわかりやすい授業ができる授業力」
	国語・算数（小）	「学校の研究テーマにあわせて、国語、算数を学んだ。それを機会に国語を研究テーマとして学び続けている。」

50 代教員がもつ「学び続ける教員像」についての研究

生徒指導・子ども理解	新しい教科 (小)	「生活、総合的な学習などの新しい教科・領域について、教育内容や指導方法を書籍や研究会、研修会への参加で学んできた。」 「生活科や総合という新しい教科・領域について大学院派遣でじっくり学んだ。」	
	情報機器操作 (小)	「情報教育については、好むと好まざるに関わらず学び続けていけないことには、現場の ICT 化についていけない。」 「教育テレビ放送利用、視聴覚教材自作、テレビカメラやパソコンなどその時々最新の視聴覚機器や情報機器を使った授業」	
	わかる授業 (小中)	「子どもにわかる伝え方、見せ方について課題意識を持ち、プロのコンサルタントに学び、若手教員に伝えた。」 「授業力の向上」 「わかる授業、やる気になれる授業のため教材研究」	
	学級経営 (小中)	「学級の中で協調性を身につけさせる指導法」	
	特別支援教育 (障害児教育) (小中)	「障害児教育について、障害理解や教え方、教材を学んだ。」 「様々な知識や新しい知見を得て、現場の先生方に役立ちたい。」 「担任した子をどう指導するか学び続け、特別支援教育士の資格を取得した。」	
	生徒指導	「子どもの心理状態を考えること」	
	心理学 (小中)	「心理的サポートの大切さを実感し、学校心理士、ガイダンスカウンセラーの資格を取得した。」	
	部活動指導 (中高)	「顧問として戦術、戦略を含めた専門性や指導法」	
	ライフステージに合わせた学び	中堅・教育委員会・管理職としての職務 (中高) 安全・管理 (中)	「社会の変化に対応するため、先を見越した教育について学び、教員に伝えること」 「管理職として、安全・管理を軸にした指導」
	教育哲学	生き方 (小)	「教育哲学や人の生き方など、通勤電車で本を乱読した。」
生活すべて	仕事・家庭・子育て・趣味 (小高)	「植物栽培や大工仕事、土木工事など専門家に学び、職場環境の整備や趣味に生かしている。」 「仕事に家庭、趣味と大変欲張りな生活を続けてきたが、これらすべての経験が、私にとって貴重な学びであった。」	

3.3.5 生活すべて

《生活すべて》では、「植物栽培や大工仕事、土木工事など専門家に学び、職場環境の整備や趣味に生かしている。」「仕事に家庭、趣味と大変欲張りな生活を続けてきたが、これらすべての経験が、私にとって貴重な学びであった。」<仕事・家庭・子育て・趣味 (小高)>との回答を得ている。女性教員からの回答に複数見られたが、男性教員からの回答もあった。先に述べたように、教員の業務は家庭生活を犠牲にするほどであるが、教員という仕事と家庭との両立で悩むことさえ、自身の学びとして、経験値を上げ、教員としての自身の学びに変えていこうとする意図が読み取れた。

このことについて、すでに退職した教員にインタビューをしてみた。すると、「教員は、自分も含めて、生活全部が教員としての引き出しを増やすことにつながると思っているいろいろな挑戦する人が多い。でも、退職してみると、さて、どうやってこれから生きていったらよいかわからなくなる人も多い。

学校で、ボランティアをしたり、教員時代に興味を持った趣味や、勉強を続けようとしたりする傾向がある。」とのことであった。学び続けることは、退職後も続くのあろうか。

3.4 学び続けられなかったことがあったか、いつ頃あったか（阻害要因の有無と阻害要因時期）

学び続けられなかったことがあったか、いつ頃あったか（阻害要因の有無と阻害要因時期）は、表4に示した。このことは、対象者の性別、校種、教育委員会経験、管理職経験も深く関わっているのではないかと考え、対象者別に表に表した。

サンプル数15の調査から正確な結論を導くのは無理があるが、50代の教員は30代で子育てや家族の介護など自身の家庭のことで思うように学べなかったと感じている傾向があると推測できる。そして40代になると、学校の中堅教員として任される業務の負担が大きくなり、自分の授業や学級が後回しになる。あるいは、教育委員会指導主事等や教頭になり教員の仕事とまったく違う種類の業務を担うことで、自身が考えて学ぶという行為ができなかったと捉える傾向がある。

また、同じように30代で子育て等家族の問題を抱え、40代で業務が多忙になっているはずであるのに、学び続けられなかったことはなかったと回答する50代の教員も15名中6名（40.0%）いる。この6名は、男性4名、女性2名で、校種別で見ると小学校3名、中学校2名、高等学校1名である。さらに、6名のうち教育委員会経験があるのは3名である。管理職経験は6名のうち5名であった。

表4 学び続けられなかったことがあったか、いつ頃あったか（阻害要因の有無と阻害要因時期）

対象者	性別	校種別	教育委員会経験	管理職経験	阻害要因の有無	阻害要因時期（歳）
A	男	小学校	なし	あり	無	
B	男	中学校	なし	あり	無	
C	女	小学校	なし	あり	無	
D	女	小学校	なし	なし	有	30代
E	男	中学校	なし	あり	有	40代
F	女	中学校	あり	なし	有	30代・40代
G	女	中学校	あり	なし	無	
H	女	小学校	あり	なし	有	24・28～33
I	女	小学校	あり	なし	有	24～33
J	女	高等学校	なし	あり	有	30代～40代
K	男	高等学校	あり	あり	有	35
L	女	中学校	なし	なし	有	40
M	男	小学校	あり	あり	無	
N	女	小学校	あり	あり	有	30代
O	男	高等学校	あり	あり	無	

調査対象者全体から見ていくと、男性6名中4名（67%）、女性9名中2名（22%）が、学び続けられなかったことがないとしている。校種別で見ると、小学校7名中3名（43%）、中学校5名中2名（40%）、高等学校3名中1名（33%）が、学び続けられなかったことがないということになる。学び続けられない阻害要因の多くは、女性の子育てで生じると仮定していたが、そうとは限らないのかもしれない。これらの回答から、学び続けられなかったと感じるか感じないかは主観的な要素が強く影響すると考

える。学び続けられなかったことはないと回答した40%の50代の教員6名のうち、半数の3名は教育委員会経験者で、さらに管理職経験者が6名中5名（83.3%）であることから、何らかのモチベーションの違いがあるのかもしれないとも考える。このことは、大きなサンプルでアンケート調査を行ってみたいところである。

3.5 学び続けられなかった要因は何か（阻害要因）

学び続けられなかった要因は何か（阻害要因）については、表5に示した。学び続けられなかった要因は何か（阻害要因）という問いに対して、回答はサブカテゴリー4個が抽出され、カテゴリーは、《家庭》、《職場》の2つを抽出した。表4と併せてみていくと、阻害要因とその時期の連関は、50代の教員の30代で家庭のことが、40代で職場のことが集中していることがわかった。

3.5.1 家族

《家族》は、「子どもが小さい頃。教員は自分の子どものことをほったらかしなので、休日等ではできるだけ子どもを世話したり、向き合っていたかった。夫は休日出勤で子どもを見てくれる人もなかったため。」「行かなくていい研修には行かず、夏休み等の行かねばならない研修のみ行っていた。」「教材研究も中途半端で、振り返っても、当時の児童には申し訳なく思う。」「時間がなかった。家事・育児のため。」<子育て>という回答を得た。子どもが小さい時に、子育てで時間に追われることは不可抗力である。それでも、50代の教員は、わが子に向き合う時間が少ないことを申し訳なく思うと同時に、その時期に受け持った教え子に対しても全力で向き合えていないことを申し訳なく思っていることが読み取れる。

また、「家族の病気等による」、「家族が病気」<家族の病気>という回答は、いずれも短い回答であるが、人生の中で精神的にも肉体的にも大変な看護が必要であったことを振り返っていることが推測される。そのような時も、代わってもらえる人が居ないので自分がしなければということになるのであろう。《家族》においては、すべて女性の回答であった。

3.5.2 職場

《職場》は、「9年間教頭として、勤務の間は日々の業務多忙につき学ぶ余裕がなかったと感じる。」「学校業務の多忙」「校務が多忙となった時期に学びはおろそかになった。」「業務に追われ、教材研究がおろそかになり、直前の授業の用意が精一杯ということが何度もあった。」<業務の多忙>という回答を得た。すべての回答が、忙しいではなく、多忙と言う文言になっている。また、おろそかという文言も複数見られる。これらの記述から、仕事に追われ、様々なことを犠牲にしてもやらねばならない業務があり、その結果、肝心の授業に支障をきたさないよう最小限の準備で臨まねばならないこと、自身の人間性を磨かねばならないのにその余裕すらないことに対する苦悩が読み取れる。

また、「同僚と自分を比較して自信を喪失した」「担任を10年以上継続して行っていたため、キャリアアップのため担任以外の分掌を希望したが、男性中心の職場環境のせい、（男女比のバランスか

ら担任をせざるをえず) かなわなかった。」<職場の人間関係>という回答から、50代の教員も、同僚に翻弄され思うようにいかない時期を経験してきたことがわかる。今後インタビューなどすれば、すべての教員から、学び続けるにあたって同僚が阻害要因になるという話を聞き出せるかもしれない、意外なポイントである。

表5 学び続けられなかった要因は何か(阻害要因)

カテゴリー	サブカテゴリー	具体的内容
家族	子育て	「子どもが小さい頃。教員は自分の子どものことをほったらかしなので、休日等はできるだけ子どもを世話したり、向き合っていたかった。夫は休日出勤で子どもを見てくれる人もなかったため。」
		「行かなくていい研修には行かず、夏休み等の行かねばならない研修のみ行っていた。」
		「教材研究も中途半端で、振り返っても、当時の児童には申し訳なく思う。」
		「時間がなかった。家事・育児のため。」
	家族の病気	「家族の病気等による」 「家族が病気」
職場	業務の多忙	「9年間教頭として、勤務の間は日々の業務多忙につき学ぶ余裕がなかったと感じる。」
		「学校業務の多忙」
		「校務が多忙となった時期に学びはおろそかになった。」
		「業務に追われ、教材研究がおろそかになり、直前の授業の用意が精一杯ということが何度もあった。」
	職場の人間関係	「同僚と自分を比較して自信を喪失した。」 「担任を10年以上継続して行っていたため、キャリアアップのため担任以外の文章を希望したが、男性中心の職場環境のせい、(男女比のバランスから担任をせざるをえず) かなわなかった。」

3.6 学び続けてどうなりたいか(動機・欲求)

学び続けてどうなりたいか(動機・欲求)については、表6に示した。学び続けてどうなりたいか(動機・欲求)という問いに対して、回答はサブカテゴリー6個が抽出され、カテゴリーは、《子ども》、《自分自身》《後進》《その他》の4つを抽出した。

3.6.1 子ども

《子ども》は、「子どもに豊かな学びを提供したい。」「学校で子どもを教える時間は限られている。だからこそ、その子の生き方にプラスになるような学びを提供したい。」「学び続けることはすべて子どもに還元できると考える。」<子どもの成長>の回答を得た。また、「わかる授業をして、学力をつける。生きる力につなげたい。」「よりわかりやすく、充実した授業ができる授業力を身につけたい。」「わかりやすい授業」の回答も得たが、<子どもの成長>のサブカテゴリーに入れずにあえて分けた。この2つはどちらも子どもにかかわる動機だが、今現在目の前にいる子どもの姿と、教え子の将来の姿という点であえて分類した。複数の50代の教員が、学び続けることは子どもにすべて還るから

という文脈に言及している。前述したように、50代の教員が持つ、学び続けなければ子どもの前に立てないという意識と一貫している。

3.6.2 自分自身

《自分自身》は、「忙しいが自分の人生が豊かになっていると感じる。人としてもっと視野を広め、もっと楽しいと感じることができる人生にしたい。」「多くの子ども、保護者、後進の役に立ちたい。自分の人生に納得ができ、私として生きることもまんざら悪くないと思えたら人生至上の喜びである。」「学級をうまく経営し、仕事にやりがいを感じたい。」＜人生を豊かに＞という回答を得た。

また、「今でも教え子の一步前を歩みたい。」「どうなりたいという目的はない。向上し続ける過程が大切。」「人間関係を円滑にできるようにになりたいし、自分自身の心身の耐性をつけたい。」「自分の力量では、まだまだ学ばねばならない。公立学校ではない広い世界で通用する力量をつけたい。」＜向上し続ける＞の回答を得ている。これら2つのサブカテゴリーについても、分類して分けるべきか迷うところである。というのも、学び続ける動機としては、さらなる自身の向上とそれともなう充実感はいかに豊かな人生と連関するからである。定年退職も視野に入り、子どもの前に立てる時間も限られているにも関わらず学ぼうとするのは、50代の教員が老後も含めたその後の人生に、積み重ねてきた学びをプラスに変えて生きていく力にしていこうとする意識が働いているように読み取れる。学び続けていなかったら、このような精神的な域に達していなかったであろうという自負も読み取れる。

3.6.3 後進

《後進》は、「様々な知識や新しい知見を得て、後進の役に立ちたい。」「自分の学校を創設したい。もしくは、魅力ある先生を育成したい。」「前向きな教師集団（チーム）を作りたい。」＜後進育成＞という回答を得た。このカテゴリーは、50代の教員だからこそ出てくるものであろう。他の年代の調査も行って検証をしてみたいところである。後進育成など、人の役に立ちたいということは、自分の人生を豊かにしたいという心理に共通するとも考えられる。

3.6.4 その他

《その他》は、「仕事を遂行するため当然の責務である。責任ある仕事をするため当然である。」＜当然のこと＞の回答を得た。あえて、その他として1つのカテゴリーを生成したのは、回答者の強い意志が文脈から読み取れたからである。他にも、「どうなりたいという目的で学び続けるのではない。」という文言が回答の中に複数見られた。50代の教員の意識の中には、豊かな人生にしたいという願いはあるが、それが目的で学び続けるのではなく、それはあくまでも結果としてそうなればよいということで、子どものため、後進のため、当然やるのだという意志は共通してもっているそれぞれの回答の文脈から推測される。

表6 学び続けてどうなりたいか（動機・欲求）

カテゴリー	サブカテゴリー	具体的内容
子ども	子どもの成長	「子どもに豊かな学びを提供したい。」
		「学校で子どもを教える時間は限られている。だからこそ、その子の生き方にプラスになるような学びを提供したい。」
		「学び続けることはすべて子どもに還元できると考える。」
	わかりやすい授業	「わかる授業をして、学力をつける。生きる力につなげたい。」 「よりわかりやすく、充実した授業ができる授業力を身につけたい。」
自分自身	人生を豊かに	「忙しいが自分の人生が豊かになっていると感じる。人としてもっと視野を広め、もっと楽しいと感ずることができると人生にしたい。」
		「多くの子ども、保護者、後進の役に立ちたい。自分の人生に納得ができ、私として生きることもまんざら悪くないと思えたら人生至上の喜びである。」
		「学級をうまく経営し、仕事にやりがいを感じたい。」
	向上し続ける	「今でも教え子の一步前を歩みたい。」
		「どうなりたいという目的はない。向上し続ける過程が大切。」
		「人間関係を円滑にできるようになりたいし、自分自身の心身の耐性をつけたい。」
後進	後進育成	「様々な知識や新しい知見を得て、後進の役に立ちたい。」
		「自分の学校を創設したい。もしくは、魅力ある先生を育成したい。」
		「前向きな教師集団（チーム）を作りたい。」
その他	当然のこと	「仕事を遂行するため当然の責務である。責任ある仕事をするため当然である。」

3.7 なぜ学び続けるのか（信念・哲学）

なぜ学び続けるのか（信念・哲学）は、表7に示した。なぜ学び続けるのか（信念・哲学）という問いに対して、回答はサブカテゴリー3個が抽出され、カテゴリーは、《人生》、《教員》《子ども》の3つを抽出した。この問いは、これまでの問いの集大成として、それぞれの50代の教員が持つ教員としての個人個人の信念や哲学を聞き出す目的で設定したので、回答として他の問いと「同じく」という記述が複数見られた。信念や哲学は、共通することが少ないだろうと仮定していたが、記述の表現方法は違えど、同様のカテゴリーに分類でき、3つに集中した。

3.7.1 人生

《人生》は、「自ら課題を見つけ自ら学んで成長していかなかったら面白くないから。」「教員であるから。これで生かされている。折れそうな時はいっぱいあるが。」「人生を楽しみ、自分を広げたい。退職したら全く違うジャンルで学び続けようと思う。」「経験=学び。経験は宝。無駄な経験は一つもない。すべてがいつか必ず力になる。自分だけにしか歩めない人生がきっとある。」「生涯を通して取り組んでいる教員という仕事の充実感、達成感のため学び続ける。悔いのない豊かな人生を送るため。」<豊かな人生>の回答を得た。苦労はあるが、最後は楽しい人生にするための強い

思いが伝わる内容である。

3.7.2 教員

《教員》では、「学び続ける姿勢を失った時、教える資格を失う。」「学び続ける者のみが教える資格がある。」「退職まであと数年だが、少しでもいい教師をめざす。」「学び続けるからこそ魅力ある教員である。」「学び続けなければやっていけない。この仕事は誠実さ、謙虚さが必要。」「教師として立ち続けるため。働き続けるため。」「仕事を遂行するため当然の責務。」「子どもや保護者である人を相手にする仕事である限り学び続けることが当たり前。」＜教師の資格＞の回答を得た。言い回しは異なるが、内容は同じであると考える。教師とは何かという定義のように読み取れるが、ここにある記述は教師の哲学である。ただ、これらは50代になってから持ったものではないと思われる。何歳くらいで、このような域に達するのか、インタビューしたいポイントである。

3.7.3 子ども

《子ども》は、「すべて子どもに還元できる。」「子どもは教師を選べない。出会う教師が、その時点で持っている力を最大限に発揮して教育にあたることが使命である。」＜子どものため＞の回答を得た。子どもというカテゴリーを立てたが、着地点はやはり、子どものために学ぼうとしない者は教師の資格はないし、そのような教師人生は達成感がないということころだろう。

表7 なぜ学び続けるのか（信念・哲学）

カテゴリー	サブカテゴリー	具体的内容
人生	豊かな人生	「自ら課題を見つけ自ら学んで成長していかなかったら面白くないから。」
		「教員であるから。これで生かされている。折れそうな時はいっぱいあるが。」
		「人生を楽しみ、自分を広げていきたい。退職したら全く違うジャンルで学び続けようと思う。」
		「経験＝学び。経験は宝。無駄な経験は一つもない。すべてがいつか必ず力になる。自分だけにしか歩めない人生がきっとある。」
		「生涯を通して取り組んでいる教員という仕事の充実感、達成感のため学び続ける。悔いのない豊かな人生を送るため。」
教員	教師の資格	「学び続ける姿勢を失った時、教える資格を失う。」
		「学び続ける者のみが教える資格がある。」
		「退職まであと数年だが、少しでもいい教師をめざす。」
		「学び続けるからこそ魅力ある教員である。」
		「学び続けなければやっていけない。この仕事は誠実さ、謙虚さが必要。」
		「教師として立ち続けるため。働き続けるため。」
		「仕事を遂行するため当然の責務。」
「子どもや保護者である人を相手にする仕事である限り学び続けることが当たり前。」		

子ども	子どものため	「すべて子どもに還元できる。」
		「子どもは教師を選べない。出会う教師が、その時点で持っている力を最大限に発揮して教育にあたることが使命である。」
		「子どもたちに生きる力をつけるために、いろいろなアプローチを考え、小さな努力を積み重ねる。努力はうそをつかない。」

4. 考察

本研究を行うにあたり、すべての教員が、自分は「学び続ける教員」であると回答し、それは、教師としての使命だからであると回答するという仮説をたてていた。研究の結果、大まかに述べれば、この仮説は正しかったという結論になる。しかし、アンケートの回答の記述にはさまざまな文脈が隠れていた。子どもという人間を育てる専門職の教員は、キャリアアップのために学ぶのではなく、学ばなければ子どもの前に立てないと言っているのである。しかも、50代の教員経験30年以上のベテランがそう回答するのである。確かに、教育現場では、キャリアを積んできたはずである50代の担任であっても学級崩壊が見られる。こういうことは、他の職種では考えられないのではないだろうか。教員の回答は、激動の社会の変化についていくために、またそういう社会に生きる子どもを育てるために、新しい教育について学び続けなければならないという共通点があった反面、変わってはいけないものを見極めて守らねばならないという考えも見て取れた。「不易と流行」は、教員の中でよく言われるが、50代の教員は、ここまでのキャリアを重ねてきたからこそ、実感を持って言えるのではないだろうか。このことについては、今後、40代や30代の教員にも同様の調査を行って検証していきたい。また、50代の教員の回答には大変重みがあり、ぜひインタビュー調査で、詳細を明らかにしたいとも考える。

こうして、まとめながらも、研究中にもう一点の疑問が湧いた。「学び続けない教員」の存在である。学び続けないと子どもの前に立てないといえるほど、人間を育てるという仕事は、学んで「当然」との回答やそう読み取れる文脈の回答が多かった。しかし、「学び続けない教員」が存在するからこそ、文部科学省は「学び続ける教員」という言い方をしているのであろう。この点について、何人かの教員と面談し、インタビューを試みた。興味深いことに、「学び続けない教員は存在する」という話を聞くことができた。では、どういう教員が「学び続けない教員」であるか、重ねて問うと、数人の教員が共通して、「学ばねばならないことを学ぼうとせず、別のことに没頭している教員」と話した。これらのインタビューで、学び続けていないと指摘される教員は、中学校や高等学校の部活動ばかりに力を入れていたり、自分の専門教科や学級経営をおろそかにして授業が成立していなかったり、学級が荒れて児童生徒が困っているのに気づいていなかったりする教員が具体例としてあがっていた。

もう一度、本研究の結論を述べるとしたら50代の教員がもつ「学び続ける教員像」は、わかる授業をすることと児童生徒理解に基づく学級経営と生徒指導ができるよう学び続けている教員像であるといえるだろう。30年以上の教員経験があってもなお、新しい教育課題に対応できるよう学ばねばならないし、それが教員なら当然であると50代の教員は捉えているのである。そして、50代の教員は、教育現場の多忙化や管理職の激務のため、それができない状況に置かれやすく、これでは子どもの前に

立てないではないかと憤りを感じており、自由記述のあちらこちらにそのような文脈が記述されていたことを付け加えておく。

謝辞

ご多忙の中、本研究に協力いただいた教員、関係各位に厚くお礼を申し上げます。

【参考文献】

- 文部科学省ホームページ 中央教育審議会「教職生活の全体を通じた教員の資質能力の総合的な向上方策について（答申）」平成 24 年 8 月 28 日
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1325092.htm (2016-9-12 確認)
- 文部科学省ホームページ 中央教育審議会「これからの学校教育を担う教員の資質能力の向上について～学び合い、高め合う教員育成コミュニティの構築に向けて～（答申）」平成 27 年 12 月 21 日
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1365665.htm (2016-9-12 確認)
- 文部科学省ホームページ 中央教育審議会「今後の教員養成・免許制度の在り方について（答申）『6. 教員に対する信頼の確立に向けて』」平成 18 年 7 月 11 日
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/attach/1337014.htm (2016-9-12 確認)
- 文部科学省ホームページ 教育職員養成審議会「養成と採用・研修との連携の円滑化について（第 3 次答申）『2 教員に求められる資質能力』」平成 11 年 12 月 10 日
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/old_chukyo/old_shokuin_index/toushin/attach/1315387.htm (2016-9-12 確認)
- 秋田喜代美（2009）「教師教育から教師の学習過程研究への転回—マイクロ教育実践研究への変貌」矢野智司編著『変貌する教育学』世織書房
- 佐古秀一（2011）「学校の組織特性をふまえた学校組織変革の基本モデル—学校の内発的改善力を高めるための学校組織開発論の基本モデル—」佐古秀一他著『学校づくりの組織論』学文社

キーワード：学び続ける 教員の資質能力の向上